

アジア女性

交流史

研究

全十八号

港の人

一九六七年十一月
一九七七年二月

編

山崎朋子
上笙一郎

アジア女性交流史研究

007 「アジア女性交流史研究」の思い出 山崎朋子

041	第一号	一九六七年十一月	359	第十号	一九七一年九月
067	第二号	一九六八年三月	397	第十一号	一九七二年三月
105	第三号	一九六八年七月	441	第十二号	一九七二年十一月
143	第四号	一九六九年一月	487	第十三号	一九七三年七月
181	第五号	一九六九年七月	533	第十四号	一九七三年十二月
209	第六号	一九七〇年一月	559	第十五号	一九七四年七月
245	第七号	一九七〇年九月	599	第十六号	一九七四年十二月
291	第八号	一九七〇年十二月	639	第十七号	一九七五年十月
317	第九号	一九七一年四月	671	第十八号	一九七七年二月

目次

山崎朋子

「アジア女性交流史研究」の思い出

雑誌「アジア女性交流史研究」と言っても、頷いて下さる方はほとんどいないだろうと思う。——なにしろ、〈アジア〉についても〈女性史〉に関しても全くの研究的素人しろうとでしかない三十歳前後の女たちが、当初三人で研究会を発足させ、名ばかりのその会からタイプ謄写版印刷で数百部だけ作っていた雑誌だったのだから。しかも、何十号と出たのではなく、十八号までしかつづかなかったものなのだから。

しかし、今、その内容に眼を止められた出版社の社長兼編集長があつて、復刻版を作りたいと言われるのである。編集・発行人だったわたしとしては面映おもはばいという域を越えて羞はがしい思いが先に立つのだが、敏腕のジャーナリストたるその人が復刻の必要ありと認めて下さったのだから、「アジア女性交流史研究」誌、アジア研究・女性史研究の上でながしかの意味を持っていると言つてよいのであろう。

そしてその敏腕のジャーナリストは、復刻に際し、始終一貫してこの誌の発行「責任者」だったわたしに解題Ⅱ解説文の執筆を依頼された。そこでわたしはペンを執ることとしたのだが、省みればこの小誌は、わたしの個人史に深くかかわ

っており、それ故、わたし自身の生活的体験から書きはじめざるを得ないのである——

わたしⅡ山崎朋子は、『サンダカンまで（わたしの生きた道）』（二〇〇一年・朝日新聞社）に記録したように、二十代前半の頃、東京大学の大学院で国際政治学を研究していた朝鮮青年と知り合つて籍を入れぬ結婚をしたが、数年ののち、その人への愛情も信頼もあるのに別れたという閱歴を持っている。一九五〇年代後半期のその時分、在日の朝鮮民族の政治的運動は盛んだったが、しかし、〈民族〉にこだわるあまり、青年男女が〈日本人〉と結婚するのを否定するような雰囲気が強かつたと言わなくてはならない。在日朝鮮人社会における〈日本人妻・日本人夫、忌避おとの雰囲気〉、わたしは、昨日どこの夫妻が離婚をした、あしたどこの夫婦が別れるそうだ——という噂うわさを耳にした。

わたしは、夫が、日本人のわたしを妻としている故に政治運動において不利な立場に置かれるのは、申し訳ないと思つた。そこでわたしは、彼にその信ずる道を悔いなく進ませるために、言葉を換えれば彼への愛情と信頼の証あかしとして、別離を敢行したのである。今にして省みれば、純粹ではあるもののいささか幼い決断だが、二十代半ばのわたしには、そのような愛情の示し方しか出来なかつたのだ。

数年ののち、わたしは児童文化研究を志望している上笙一郎という青年と出会い、そうして今度は籍を入れての結婚をした。この結婚に先立って、わたしは上に朝鮮青年との生活体験を打ち明けたが、これは、わたしにとってひとつの踏み絵だと言ってさしつかえなかった。——当時の日本社会にはアジア諸国⇨アジア人蔑視の風潮が濃く、知識人のなかで、若しも上が朝鮮人・中国人への差別の思想や感情を持っている人であつたら、わたしは、朝鮮の革命青年を信じ愛したわたし自身のプライドにかけて、そういう人と結婚する訳に行かないからだ。

しかし、話を聞いた上は、「わたしには、その人と同じような立場に身を置く李丞玉という朝鮮青年の友人があり、その友人と、一、二年だったけれど壁一枚をへだてて一緒に暮らしたことがある」と言った。そして付け加えて、「朋子さん、今のお話は、あなたの人生における非常に貴重な体験であり、重要な一ページです。朝鮮人蔑視の強いこの国でそういう体験を持ったことは、さぞかし辛かったですでしょうけれど、それを忘れたり水に流したりしてしまうのではなく、あなたのこれからの人生を深めることに生かして下さい」と言ったのだ。

この言葉に力を得てわたしは上との結婚に踏み切り、やがて子どもに恵まれたが、上はあまり学歴のない児童文学の研究者、わたしは、しばらく前、今日言うところのストーカーに顔を傷つけられたため働くことが出来ず、したがって貧しい生活。そうした中で、わたしの気持は次第に〈女性史〉の研究に傾いたが、当時出ていた女性史研究の書物を読んで行くうち、かつての朝鮮青年への思いもひとつのモメントとなつて、アジア諸民族の歴史はどのような歩みを刻んでいるのだろうか、日本女性とアジア諸民族の女性とはどのような交流を持っていたのだろうか——ということを知りたくなつて来たのである。主題的に絞れば、〈アジア女性史〉および〈アジア諸民族の女性交流史〉ということになるのかも知れない。

軽侮的に〈駅弁大学〉と言われていた頃の地方大学に二年間だけ学んだわたしには、他の外国語はもちろん英文を読む力すらなく、したがって、アジア諸国の女性史やアジア諸民族間の女性交流史の学習に進むことは不可能である。しかし、それでもなお夢を諦め切れなかったわたしは、上の少し年上の友人で中国文学・中国問題にも詳しい文芸評論家⇨尾崎秀樹さんをつかまえて、「アジア諸国の女性の歴史を研究している会、またはアジアの女性たちの交流の歴史を握もうとし

ている会は、ないでしょうか。そういう研究会があったら、入れてもらって、勉強をしたいんです」というふうに頼んだ。ところが、しばし考えた末の尾崎氏の答えはこうだったのである。——「そういうふうな研究をしている会は、残念ながらどこにも無いですね。しかし、有ったとしても、そこへ入れてもらったんじゃないですか。朋子さん、自分でそういう研究会を創りなさい。人数はどんなに少なくても構わないから、自分で始めなさいよ。それが、一等良い勉強になるはずだから」

わたしは大いに落胆したが、しかし、尾崎氏からアジア女性史やアジア女性交流史を研究している会は皆無だと知らされたことで、少からず心が平かになったことも確かである。こうしたテーマで研究している人が他にいないなら、素人のわたしがどんな動きをしたって一向に構わないのだ。

そこでわたしは、先の上の話の中にその名の出て来た李丞玉と夫人Ⅱ平林久枝、ふたりとも上の文学仲間であったのだが、この夫婦に話を持ちかけた。平林久枝さんはその名前から分かる通り日本人でわたしと同じ歳、早稲田大学で英文学を学んだ人だが、朝鮮国籍の青年Ⅱ李丞玉さんと結婚したことで、かつてのわたしと同じ悩みを抱えていた。おのずからに話は合い、もうひとりかふたり仲間が欲しいね——と悩

んでいたところへ、そのひとりが出現することになったのだ。——当時、夫の上笙一郎のところへ書評依頼に来ていた「図書新聞」の編集者に坂本志げ子という女性があったが、この人が、東京都立大学で竹内好の指導を受けた中国文学の研究者だったからである。

二

貧しい暮しであるわが家の質素な応接間において顔の合ったわたしと夫婦と李丞玉Ⅱ平林久枝夫妻、および坂本志げ子さんの五人。この五人で一九六六年の春の頃から、へアジア女性交流史研究会」というささやかな研究会を始めた。〈研究会〉と言ってはいるものの、会場は借家であるわが家の質素な応接間で、集まるのは五人だけ、本当に仲間内の会合であった。

しかし、そんなに小さな仲間内の集会であったのに、内容はそれほどおざなりではなかったと言ってよいように思う。記憶は薄れて来ているけれども、今なお残っている当時のわたしのノート『アジア女性交流史（一九六六年）』を覗いてみると、月に一度ないし二度開かれた集りでは、以下のようなテーマの報告が爲され話し合いがおこなわれているのであ

る。——「福田英子と大阪事件」（山崎朋子）、「フィリピン独立運動の指導者ホセ・リサル」（上笙一郎）、「愛親覚羅浩について」（田辺洋子・坂本志げ子）、「安井哲子とシヤム王宮女学校の教育」（山崎朋子）、「朴烈と金子文子」（李丞玉）、「朝鮮三・一運動の女性たち」（平林久枝、その他、その他）。

平林久枝さんは英文を読め、坂本志げ子さんは中国文を読めたが、わたしの読むことの出来るのは日本文だけ。おふたりもまだ外国の文献を購い得る身の上になく、その報告も日本で出版された書物や雑誌にもとづいてのことが多かったが、わたしのは百パーセント国内文献に依るものだった。報告のために古書店を回ってはさまざまな書物を買ったが、「アジア関係の本を三冊出せば、出版社は潰れる」と言われていた頃だからアジア関係の本の値は安く、負しいわが家でも相応に求めることが出来たのである。

こうして小さな集りをつづけて行くうち、わたしたちが誘ったりまたどこかで噂を聞き附けたりした結果であるう、ひとり、またひとりと、新たな顔が加わるようになっていったのだ。アジア問題の学者や研究者ではないのだが、何等かの事情でアジアの人・問題・文化・生活などに抜き差しならぬかわりを持ってしまった——というような人が多かった。そして一年半ばかり経った一九六七年の秋頃には、メンバーは

十人くらいにまでなっていただろうか。

そうなると、誰の口からともなく、「研究会での報告を空中に散らしてしまうのは惜しいし、みんなの考えていることを書いて、それを載せる雑誌が欲しいわね」という声が挙がって来た。毎月の研究会の会場が家であり、へアジアとへ女性にアクセントを置いた会だったのでわたしが責任者になっていたが、わたしだけだったら、この声を集約して現実化することはむずかしかったと思う。しかし、わたしのつれあいの上は児童文学の評論をもって生活している人であり、先年まで李丞玉・平林久枝夫妻と一緒に文学同人誌を出していたという人だった。その同人雑誌体験に照らして、もっとも安価に作ることの出来る雑誌型態と印刷方法を考究してくれ、そこで生まれたのが小冊子「アジア女性交流史研究」だったということになるのである。

三

「アジア女性交流史研究」創刊号の出たのは一九六七年十一月、B5判、二十四ページ、表紙も裏表紙もなく、表紙に当る第一ページから本文のはじまるへ雑誌」と言うよりもむしろへパンフレットだ。復刻された実物を見て下さればわ

かるように、本文は原則として三段組み、印刷は当時おこなわれていたタイプ騰写版印刷である。当時もっともノルマルなのは活版印刷だったが、それと並んで、少数数を安価に仕上げる手立てとして騰写版印刷というものがあつた。油を滲みこませた薄様和紙を細かな網目鉄板の上に置き、鉄筆をもつて文字Ⅱ文章を書き記し、それを原紙として下の紙にローラーで油性インクを押し刷き、文章および絵画を印刷するという方法だ。当初は人間による鉄筆書字の手立てしかなかったが、一九六〇年代の半ば頃から油性原紙にタイプライターで文字を打ったものの印刷も可能となつた。製品は活版とあまり変わらないのに製作費用はたいそう安く、そこでわたしたちはこのタイプ騰写版印刷に飛び附いたのだつた——と言わなくてはならない。

創刊号には、三段に分けた上段に誌名と発行主体のデータ、下段に一冊の内容目次を記し、中段に〈創刊マニフェスト〉と言つてもよい小文を載せたけれども、この小文はわたしと上とで書いた。——まだ、会で討議しその末にまとめることにしなければならぬ程には、研究会そのものが整つていなかったからである。

そんな危や腑やな会の冊子にしては、今日の眼で見ると、その執筆者、ずいぶんと豪華に写るのではないだろうか。劈

頭を飾るのは山川菊栄「私の会つたアジアの女性たち・そのⅠ」だが、山川菊栄は自由主義に立つ「青鞥」の平塚らいてうを批判して登場した社会主義の女性評論家、日本の女性解放思想史の上に大書されなくてはならない人である。そういう山川先生に原稿をお願いしたのは、当時のアジア女性交流史研究会のメンバーの総意であり、具体的には、その頃わたしが加わっていた婦人問題懇話会をとおして山川先生と面識があつたからであつた。しかし、それにしても山川菊栄先生、全く名のないわたしたちの会の小冊子、一円の原稿料とて差上げられぬパンフレットに、良くぞ連載で寄稿して下さつたものだ。そして、第四号まで連載されたこの稿は、やがて、平凡社「東洋文庫」版の『女二代の記』（一九七七年）に収められて、今では、日本とアジアの女性交流のひとつの大きな証言となつているのである。

この山川先生の文章のほか、小説家Ⅱ島一春「からゆきさんについて」と伊藤桂一「戦場慰安婦」のエッセイがあるが、このおふたりは上の先輩的な知己、敗戦直後期の日本占領アメリカ軍に対する娼婦政策にメスを入れた「何に対する防波堤であつたか」の水沢周さんも、上の友人。そして、創刊号より終刊号まで誌名タイトル下の装飾的デザインとしたシルエット、アジア諸民族の民族衣裳をまとうた女性黒影を描い

て下さった中山正美氏も、また上の仕事の上での仲間だったのであった。

わたし山崎朋子はというと、「アジア女性交流史」のタイトルをかかげて「海にひびくからゆきさん哀歌」という一篇を発表、以後そのタイトルでの読物的評論を書きつづけた。五回まで連載したところで、当時出ていた「三省堂新書」の若い編集者が眼に止めて下さり、『愛と鮮血(アジア女性交流史)』(一九七〇年・三省堂)という小冊として上梓する幸運にめぐまれたが、「アジア女性交流史研究」という場からの研究書というかたちでの最初の収穫、わたしとしては初めての個人著書の出版となったのである。

この創刊号、印刷費にはメンバーがそれまでに少しずつ貯めて来ていた会費を充て、売れる当ては全くないので五〇〇部を作ったと記憶している。一冊の頒価を五十円としたが、電車の最短区間の乗車賃が二十円だった当時、〈アジア〉と〈女性〉という問題に関心を持つような思索的な人なら、電車最短区間乗車賃の二倍半までの額であれば、若しかして好意的に割さいで下さるかも知れない——と考もえてのことであった。そして十人ばかりの会員は、この小冊誌を支持してくれそうな友人・知己の顔を思い浮かべ、十冊とか十五冊とかを持ち帰って頒布に心がけたのだが、しかし、実際にはわたし

たちの予想よりはるかに多い需要があったのだ。

——ということの第一は、わたしたちはこの創刊号を大小いくつかの新聞社・通信社・雑誌社に送っていたが、それらの社が紹介の記事を書いてくれたことである。既婚者であるにせよ独身者であるにせよ二、三十歳代の女性たちのついている会が小冊誌「アジア女性交流史研究」を創刊した事実には、ニュース性があったということなのだろう。発行所となっているわたしの家には、購読したいという葉書、研究会に行ってみたいという便り、会員になりたいという手紙が、一昨日おととい一枚、昨日きのう三枚、今日二枚といったふうに舞いこんで来た。

思いがけず定期購読者のみならず会員参加者まで現れて嬉しかったが、しかしもっとも驚いたのは、森崎和江氏が会員になりたいと手紙を寄よ越されたことだった。北九州の炭鉱地区に住み、日本のプロレタリア革命運動とそれに連動した文学運動の革新に深くかわわり、思想的・文学的にすでに業績を持っている森崎氏。その彼女が、世に知られた名としては山川菊栄と伊藤桂一両氏の名しか見当らない創刊号をどこかで読まれて、購読者ではなくて会員になりたいと言い越されたのだ。その信頼に対して、東京のわたしたち会員に否の答えのあろうはずはなく、彼女は早くも第二号に詩「朝鮮海峡」

を発表、以後、いくつもの文篇を寄稿されたのである。

二号発表の詩「朝鮮海峡」の一句「海(パダ)！ わだつみのひびきよ」は、わたしに、大和言葉の「わだつみ」(海)が朝鮮語「パダ」に通底していることを教えてくれた。が、加えて更に、「スナム 妹とよぶにくるしいスナム」と呼びかけられている「日本生まれの スナム」が、在日朝鮮人として日本国Ⅱ日本民族に対して幾多の抗議をした朴寿南氏であるらしいことが察せられて、わたしとしては、一層深い思いにいざなわれたのであったけれども――

四

さて、こうして社会的に船出したアジア女性交流史研究会は、それから、月に一・二度の研究会の開催と季刊を標榜しての小冊誌「アジア女性交流史研究」の発行とを主軸に、ミニグループとしての活動をつづけて行った。が、「石の上にも三年」のことわざのとおりで、やがて、特記に値するようなことが幾つも起きて来たと言わなくてはならない。箇条を追って書いて行けば、以下のようなことになるだろうか。

第一は、〈アジア〉と〈女性〉という問題に関して何等かの切実なかかわりを持っている人が、入会して来たこと。発

起人である平林久枝さんもわたしも、朝鮮人との結婚経験を持つという点で〈アジア〉と〈女性〉の問題を身に負っていたわけだけでも、そのことの反映であるのかどうか、その問題にさまざまな形で釘付けられている人たちの参加が目立つようになったのである。たとえば、満州開拓移民・満蒙開拓青少年義勇軍の体験を持つ藤生好夫さんと新舟亥三郎さん、同様な境涯より八路軍に身を投ずるといふ青春期を送った石井出かず子さん、在日朝鮮人という立場にある任晃慧さんはじめ幾人もの人たち、また、太平洋戦争に〈日本兵〉として参戦したという〈台湾人〉である林景明さん。そして、国籍は〈日本人〉でありながら〈人種〉と〈民族伝統〉をめぐって複雑な思いを余儀なくされているアイヌ族の岡本頼子さん、タイ人の学問研究者と結婚しようか否かと悩んでいた日本女性Ⅱ小谷かつ代さんといったふうに。

少し後のことのようにだが、韓国の有名な幼児教育学者、日本では自伝的な物語『半分のふるさと』(一九九三年・福音館書店)で知られる李相琴さんイサンクムも、お茶の水女子大大学院に留学していたとき、わが家でのアジア女性交流史研究会に参加されていたという。そのことが分かったのは、『半分のふるさと』上梓の少し前、夫の上笙一郎が、珍しく韓国児童文学についての講演があると知って出版会館へ出かけて行ったか

らだった。講演者はソウルⅡ李花女子大の李相琴教授。講演の終わったあと、司会者の松井直氏が「今日は、児童文学研究者の上笙一郎さんも聴きにきて下さって——」と言ったところ、李さんが「え、どこに、上さんが——？」と眼で会場を探され、上が手を挙げると壇から走り下りて来られて挨拶、「わたしは、むかし、お宅で開かれていたアジア女性交流史研究会に出席させてもらったことがあるのです」と。

第二は、北九州に姉妹研究会とでも言うべきものが生まれたということである。「アジア女性交流史研究」の創刊号を見て森崎和江氏が会員参加されたことは前に述べたが、この森崎氏とその盟友と言ってよい河野信子氏を中心として、北九州Ⅱ筑豊地区にもアジア女性交流史研究会がつくられたのであった。小冊誌第三号（一九六八年七月）の「編集後記」に早くもその初動が記され、第五号（一九六九年七月）には「九州からの便り」として北九州Ⅱ筑豊地区研究例会の過去一年間の発表テーマと報告者の名が記録されており、さらに第六号（一九七〇年一月）には会員座談会「私にとってのアジア女性交流史研究会」が寄せられているのである。

遠く離れているので、当初は東京のわたしが天草島への旅の途次に森崎氏を訪ねるとか、出版社への所用あって上京された森崎氏がわが家へ泊られるとかいったほかに、双方の

会員の直接的な交流はなかった。しかし、そのうち、夫の転勤で福岡市に移り住んだ村上百合子さんが北九州の研究例会に出席したり、事情あって北九州から東京へ転住された中村卓美さんや石井出かず子さんが、わが家の研究会に参加されるというようなことも生まれて来た。ちなみに、中村さんは第九号（一九七一年四月）にエッセイ「ある感覚（孫青年のことなど）」を、石井出さんは十号（一九七一年九月）より三回にわたって日本人でありながら「八路軍の一女兵」として体験したことを書いている。

第三に記すべきは、タイプ謄写版印刷の片々たる冊誌であるのに、著名な人の執筆や研究例会出席が驚くほど多かったということである。また、購読者にも刊行資金援助者にも、何故か名のある人が多かったのだ。

山川菊栄先生が創刊号より四号まで「私の会ったアジアの女性たち」を書かれたことは先に記したが、その次の五号（一九六九年七月）からは、平塚らいてう先生が同じタイトルで二回にわたり稿を寄せて下さった。この時期、らいてう先生は体調を崩しておられ、手も痛くてペンを持つことが叶わず、「口で話しますから、山崎さん、あなたが書き取って下さいね」と仰せられ、そこで聞いたところをわたしが文章にしたのだが、先生が〈アジア〉と〈女性〉について述べられたお

そらく唯一のものではないだろうか。そして、その頃はまだ全く無名の主婦だったわたしは、この聞き書き取りという仕事のおかげで、らいてう先生と二度におよんで親話するという幸せに、恵まれることを得たのであった――

日本の近代女性史に聳立する平塚らいてう・山川菊栄両先生のほか、多くの学者・研究者が、その渾身の力をこめたと行ってさしつかえない論文を寄せて下さっている。ざっと見て行くに、第二号の村上信彦「明治の海外売娼覚え書」、第九号の中塚明「奈良女子高等師範学校の中国人・朝鮮人留学生」と金一勉^{キムイルベン}「いわゆる『内鮮結婚』について」、第十号の山辺健太郎「アジアと日本のナショナリズム」、第十一号の金一勉「金子文子の朝鮮体験（日本の反逆女性）」といったふうにお礼など差上げることの出来ない小冊子だから、わたしたちの方からお願いで書いて戴くというわけには行かず、それなのにこのような論文が載っているのは、どの方もみずから進んで玉稿を恵与して下さったからである。「日本の植民地支配」（第六号）の欄木寿男^{タシキ}さんや「近代日本植民地史と私」（第七号）その他を發表している岡部牧夫さん、「矢内原忠雄の『植民政策』学（研究ノート）」（第十二号）を載せている小竹一彰さんたちは、今では大学教授となり歴とした専門研究者となっているが、当時はまだいわゆる若年の会員であ

った。

専門的な論文でなく幾分ならず気楽にペンを執ることの出来るエッセイとなると、何ともおおぜいの著名人が稿を寄せて下さっている。書き抜いて行くと、創刊号のところに記した島一春氏と伊藤桂一氏にはじまって、坂本徳松（ベトナム研究者）・尾崎秀樹（文芸評論家）・田中寿美子（参議院議員）・山芳郎（インド問題評論家）・高井有一（作家）・小原秀雄（動物学者）・青地晨（評論家）・竹内好（中国学者）・永井路子（作家）・阿部知二（作家）・神宮輝夫（児童文学者）・影山三郎（ジャーナリスト）・安永寿延（大学教授・日本思想史研究）・石川弘義（大学教授・社会心理学）・金耀燮^{キムヨソプ}（韓国元老童話作家）・丁堯燮（韓国女性史研究者）・佐江衆一（作家）・林英夫（大学教授・日本史）・梅森幾美（保育者）・清水真砂子（英米児童文学研究者）・菊池昌典（大学教授・ロシア思想史）・杉みき子（児童文学作家）・市川信次（民俗学者）・鹿野政直（大学教授・日本近代史研究）・三宅義子（翻訳家）・小塩れい（保育者）氏といった方々である。

それぞれに問題と味わいとをふくんだこれらの方々のエッセイは、会員たち――というより主にわたしが、すでに存じ上げていたり何かの折に面識を得た方に、「短いもので結構ですから、（へアジア）に触れての一文を書いて下さいませよ

うに」とお願いして得たものである。短文とはいえひとつのエッセイをまとめるには、相応に精神を労さなくてはならず、ただでさえ忙しい上記の方々が、良くぞわたしたちに代償なしの原稿を恵んで下さったもので、今もなお感謝に耐えない。

五

それでもうひとつ明らかにして置かなくてはならないのは、「アジア女性交流史研究」には、著名な方からの資金援助が少くなかったという一事である。二次大戦後の諸種の社会的運動にあつては、〈カンパ〉と称して運動資金を募ることが一般化していたが、わたしたちは安易にその手立てを肯定せず、始終一貫して他者へ資金援助を乞わなかった。しかし、それなのに、冊誌の「編集後記」に眼を走らせれば分かるように、多くの方が〈カンパ〉を爲て下さっているのである。第二号を見ると、創刊号を手にした徳永恕^{ゆき}（保育者・名誉都民）・岩崎治子（岩崎書店編集長）・石田アヤ（文化学院校長）の三氏が「一万二千元もの金円」を寄せられている。——一九六〇年代の後半期、中華料理店でラーメン一杯が五十円くらいだった頃の一万二千元に、どれ程の重みがあったことか。三氏とも〈男性〉ではなくて〈女性〉であり、その立場から

の後輩援助であつたと、今にして痛切にそのお心が分かるのである。

資金の〈カンパ〉はその後もつづき、第三号の「編集後記」には、「阿部知二（作家）・青木健作（編集者・作家）・大竹延（出版社長）・佐藤忠男（映画評論家）・土肥良子・永井路子（作家）・堀尾青史（児童文学者）・棟田博（作家）・山本藤枝（児童文学作家）・山主敏子（ジャーナリスト）」の皆さんから「八六〇〇円ものお金」を頂戴したとある。そしてその後の号の「編集後記」から〈カンパ〉者を挙げてみると、石森延男（児童文学作家）・白木茂（英米文学翻訳家）・山室静（大学教授・北欧文学翻訳家）・岩崎治子（岩崎美術社社長）・影山三郎（ジャーナリスト）・中塚明（大学教授）・石田アヤ（文化学院校長）・山本藤枝（児童文学作家）・小宮山量平（理論社社長）・清水澄子（日本婦人会議のち参議院議員）・松田道雄（評論家・医師）・山川菊栄（女性問題評論家）・金一勉（朝鮮問題評論家）・竹内好（中国学者）氏といった名前がつづくのである。

なお、定期購読者となつて下さった方にも、社会的に名のあ人も多かったことも付け加えて置こうか。わたしの許^{もと}には、棄てるに棄てられなかった〈購読者カード〉が残っているのだが、それこそ幾十年ぶりで繰ってみたところ、以下のような姓名が眼に触れた。いずれも、有難くて忘れられない

名前である。順不同で記録するが——小林登美枝（女性史研究家）・柳田邦夫（評論家）・松山善三（映画監督）、松本昌次（ジャーナリスト）・藤田圭雄（童謡詩人）・原田奈翁雄（ジャーナリスト）・武田泰淳（作家）・庄幸次郎（社会運動家）・島一春（作家）・朝吹登水子（フランス文学者）・石田アヤ（文化学院校長）・石牟礼道子（作家）・伊藤雅子（女性問題評論家）・犬丸義一（歴史家）・岩崎治子（岩崎美術社社長）・鹿野政直（大学教授・日本近代史研究）・熊井啓（映画監督）・古谷綱武（評論家）・財部鳥子（詩人）・棟田博（作家）・草柳大蔵（評論家）・君島久子（中国伝承文化研究家）・鐘ヶ江信光（東京外大専攻長）・佐藤忠男（映画評論家）・渋谷定輔（詩人・農民運動家）・小野和子（大学教授・中国女性史研究）・上木敏郎（土田杏村研究家）・小宮山量平（理論社社長）・五味百合子（社会事業研究家）・佐江衆一（作家）・白木茂（英米文学翻訳家）・橋本憲三（ジャーナリスト・高群逸枝記念館）・竹内好（中国学者）・山本藤枝（児童文学作家）・東畑朝子（料理研究家）・中島里美（女性運動家）・山辺健太郎（朝鮮史研究家）・清水真砂子（英米児童文学研究家）・山口玲子（ノンフィクション作家）・新島淳良（大学教授・中国問題研究）・徳永恕（保育者・名誉都民）・戸川エマ（評論家）・阿部知二（作家）・岡本愛彦（映画監督）・和田芳恵（作家）・石森延男（児童文学作家）・西順蔵（大学教授・中国思想

史）・野原四郎（大学教授・中国革命史研究）・小原秀雄（動物学者）・寿岳章子（大学教授・エッセイスト）・杉みき子（児童文学作家）・戴国輝（大学教授・台湾問題研究）・ドウス川昌代（ノンフィクション作家）・永井路子（作家）・朴寿南（朝鮮問題評論家）・中塚明（大学教授・朝鮮史研究）・林英夫（大学教授・近世史研究）・松田道雄（評論家・医師）・松本恵子（英米文学翻訳家）・宮原庸太郎（大学教授・フランス文学研究）・山川菊栄（女性問題評論家）・色川大吉（大学教授・思想史研究）・呉林俊（評論家）・佐藤幸江「いぎりゆき」（アジア児童運動家）・江刺昭子（女性史研究家）・山手茂（大学教授）その他である。

ところで、誤解されると困るので念のために附記するならば、わたしたちを根底のところ支えて下さったのは、これら著名な方々にまして、普通一般の市民であり庶民のうちの（心ある方たち）であったということである。「アジア女性交流史研究」誌上のエッセイや体験記の執筆者のうちの大半がそういう人であり、そのことは、読んで下さればすぐに分かるであろうと思う。三号より設けた「雁のたより・燕のたより」欄は諸方から寄せられる購読者の葉書・手紙の抄録だが、ここに眼を走らせれば、この小冊子にこの研究会が如何に（普通の市民に庶民）の心に支えられていたか察せられるにちがいない。

多くの方が自発的に資金を寄せて下さっており、その数は

著名の方たちより多いかも知れない。第七号ほか何号かの「編集後記」を見ると、北海道の「篠原千絵（三歳）・篠原拓也（二歳）さんから御寄金」とあるが、幼児であるこのふたりにアジア女性交流というテーマが分かるはずもなく所持金のあろう訳もない。つまりは、その母であるわたしの友人「篠原靖子さん（主婦）の一存より発しているのだが、これは、彼女の胸のうちに、将来、わが子が〈アジア問題〉にも〈女性問題〉にも関心を持つ人に成ってくれますように——との心情があったのだらう。

そして冊子を作る仕事——編集・校正・製品の管理・封筒の宛名書き・切手貼り・投函といった作業は辛勞なものが、これを担当したのも、会員をはじめわたしの周辺にいる〈普通の市民「庶民」〉のほかではなかった。第七号の「編集後記」には「今号の編集には、任晃慧・平林久枝・横田真佐子・本山みち子氏の協力あり」とあり、第十四号のそれには、「割附・校正のすべては上筈一郎氏、発送は山崎美々氏の協力による」とのあるが、前述のとおり上はわたしのつれあい、山崎美々はわたしの娘でこのとき十三歳、〈普通の市民「庶民」〉だったのである——

六

以上、アジア女性交流史研究会という小さな会の成り立ちと性格、その発行した雑誌の概略を記したのだが、しかし、北九州地区に連带的「支部的なもうひとつの研究会がつくられ、テーマに共鳴して参加する人が増えるにつれて、会にはいささかの軋みよこしまが生まれて来たとしなくてはならない。会員が増し、研究会への参加者が多くなったことは、すなわち会が盛んになって来たということのだが、そのことが、思想的ないしは世代的・体験相違的・感情的な軋轢あつれきを結果生じたのだ。

発足した一九六六年より数年のあいだ、アジア女性交流史研究会には会長もなければ冊子の編集長もなく、すべてが会員の話し合いによって決められ運営されていた。しかし、小冊誌「アジア女性交流史研究」を創刊するに当り、刊記欄に何も書かないわけには行かず、そこで、メンバーのなかで一番の年長でもあれば研究例会の場所の提供者でもあるわたし「山崎朋子が、名目の上での〈責任者〉ということになったと言おうかさせられたと言おうか。

しかし、数年にして若い会員または研究例会出席者が増すにつれて、発足メンバーは中年に差しかかり、新たな若い会

員にも責任感をおぼえてもらいたいとの考えから、会の組織を整えその分担的責任者を選任することにしたのである。

「アジア女性交流史研究」第五号（一九六九年七月発行）の「編集後記」を見ると、「このたび相談の結果、下記のような会則を設け、編集委員三名を互選した」とある。まず「会則」だが、ひとつの組織としては重要なものだから、全文を引いて置くことにしようと思う――

目的 国家的侵略の止揚をめざし、アジア諸国における女性の思想的および社会的な交流・連帯を確立するため、埋もれてはてているアジア女性の歴史と思想に、新たな照明をあてることを目的とする。

事業 会の目的を達成するため、研究会の開催、機関誌発行のほか、必要と認められる諸種の事業を行なう。

会員 思想・信仰・性別・年齢・国籍その他一切を問わず、前記の目的に賛同し、会費Ⅱ年額千円を納める者を会員とする。会員は、研究会に出席でき、機関誌を一部受け、機関誌に研究や意見を発表することが出来る。

機関誌 「アジア女性交流史研究」を、原則として季刊で刊行する。

編集委員 編集委員数名を互選、会の運営と機関誌の編集

にあたる。

購読会員 年間五百円の定期購読料を納入した者を購読会員とする。

この「会則」に従って「編集委員三名を互選」したが、選ばれたのは東京の山崎朋子と藤崎康夫、北九州の森崎和江であった。そしてさらに一年経った一九七〇年の六月、この編集委員の草稿を皆で検討した「アジア女性交流史研究会の組織・運営についての要望」という一種のアピールを作り、小冊誌の第七号（同年九月）に載せたのである。

この「要望」文は、読んで下されば分かるとおり「アジア女性交流史研究会の性格」をあきらかにしたもので、「本会は政治的結社でもなければ社会活動の組織でもなく、あくまでも、ひとつの思想追求のグループ」であり、「したがって、政治団体にしばしば見られるような団体入会などは否定し、個人の思想と生活の深みからアジアと女性の問題に逢着した人の主体的な参加を望む」とする。会の組織的な在り様としては、「みずからを、地方グループを統轄する中央組織とする」という組織論を取らず、「アジア女性交流史研究会は、東京にあってはいわばひとつの地方グループであり、現在つくられつつある各地のグループは、アジアと女性という同一

主題をグループの独自性によって追求する別な会として……独自の活動を追求していただきたい」とする。そしてこのような「要望」を爲るのは、「思想追求が、今日的な政治性にゆがめられて組織への所属性や統一性に重点をおきがちになる集団のあり方を、越えたいため」にほかならない、と。

前にわたしは、会が「会則」を設けたのは会員が増えて来たからであると記したが、それよりわずか一年後にこのような「要望」文を發表しなければならなかった真の理由は、その文末に記されている年月を見れば見当がおおよそつくだろう。「一九七〇年六月」、すなわち、へ七〇年〇日米安保条約延長反対運動が覆いようのない挫折感をともなって敗退した年であり月である。

へ六〇年〇日米安保条約反対運動も決定的な時点での前衛党の指導のあやまりその他によって敗れたのだが、その十年後におけるへ延長反対運動は進行中からすでに幾多の雑音に悩んでおり、敗北ののちは何とも凄まじい状況となった。すでにいわゆる経済高度成長期に入っていたこともあり、かつてない豊かな生活に浸りかけている国民の大半の胸には政治的アパシーが拡がっており、その裏返し現象であるかのよう、革新運動の急進派は武力闘争に向かっていたの突出を図り、いわゆる連合赤軍事件を引き起こしたのである。——妙義山

中での肅正の名による同志殺人、軽井沢における人質を取ったの籠城銃撃戦、およびイスラエルのテルアビブ空港での銃撃による無差別殺人事件、その他その他。

突出の故に瓦解〓四散した急進派の青年たちがそののちどうしたかという、新たな政治運動的な組織をつくったところもあるけれど、多くは、諸方にある思想的・文化的・生活的な諸問題の研究グループに一人ないし数人ずつで入って行き、そこを仮りの宿とする——といった動きを辿った。そしてアジア女性交流史研究会にも、そのような人が流れこむようになり、出発当時とはずいぶんと雰囲気違って来たのである。「アジア女性交流史研究会の組織・運営についての要望」は、こういった傾向をいち早くキャッチしての会の本質を護ろうとのアピールであった——と言ったらよいのかも知れない。

七

ところで、かくて新たな段階を迎えたアジア女性交流史研究会では、どのような事態が起こったか。それまでは、性別・職業・世代などに関係なく、何等かのかたちでへアジアへとへ女性へに抜差しならぬ関係〓体験を持ってしまった人た

ちが集まっていたのだが、今度は、男女共に世代的には若く、職業的には学生など経済生活を自身で負っておらず、そして〈アジア〉にかかる切実な体験のほとんどない人が多くなつた。そして知識水準も高く思考力にも長けているこれらの人たちは、革新運動挫折の鬱憤を反社会的とまでは行かぬ反常的の言説と生活態度において発散させ、革新的であると守旧的であるとを問わずすべての既成の既存の人・思想・事物を、全身を賭けて否定するのではなくて嘲笑・揶揄的に反対する——といった動きに出たのである。

あまり愉快でない研究例会での記憶がいくつもあるが、〈アジア女性交流〉というこの会の根幹的なテーマに触れての雑音を記録して置くとしようか。一九七一年から翌年にかけてのことだったが、〈日本人〉であるわたしたちが〈アジア諸国の人〉と交際する際の〈心構えの態度〉ということが話題になった。

わたしをはじめ戦前生まれである世代は、アジア諸民族の人びとと交際するには〈侵略者Ⅱ加害者意識〉を根底に置かなくてはならず、それが日本民族の一員としての責任でもあれば礼節でもある——という考えだった。けれども、急進Ⅱ突出的な革命運動の挫折体験者であるとはいえ二次大戦後生まれの青年たちの意見は、戦争は自分たちに関係も責任もな

いものだから、〈侵略者Ⅱ加害者意識〉など持っていないし、そんなものを持たずに交際する方が正しい。そしてアジア諸国の若者たちだって、自分たちと同意見のはずである、と。

研究例会のたびに繰返されるこの話題は、そのうち、話題を越えてひとつの現実的な事件となった——としなくてはならない。会員である在日朝鮮人のひとりの若い女性が、その一家の祖国への忠誠を証し立てるべく、帰国することとなった。かつて朝鮮民族の全的解放のために活動した人と共に暮し、しかしその運動の当時の限界ゆえにその人と別れた体験を持つわたしとしては、〈未だ見ぬ国〉への彼女の帰国を、理念では慶びつつも心情においては大きく懸念した。そして、ためらいつつもその懸念を口にしてしまったのだが、戦後生まれにしてアジア体験なく加えて新左翼運動挫折派の若者たちの感情的な反撥は、本当に凄まじかった。

彼女の朝鮮民主主義人民共和国への帰国にわずかにもせよ心配を差し挟むということは、怪しからぬことであり、反革命的なことであり、許しては置けぬというのだ。彼女の姉は、〈日本における朝鮮文学〉に関してすでに幾分か名のある研究者だったのだが、わたしは、その姉から強い糾弾の手紙を貰った。未見の人からのあまりにも鋭い言葉の刃を受けて、わたしは、真情を悟ってくれないその人に絶望した。わたし

はノイローゼに陥り、その病状の深まりの故だろうか、アジア女性交流史研究会は解散した方が良いのではないか——と
思うようにまでなったのである。

以上の悩みを、わたしは夫の上笙一郎や九州の森崎和江さんや若い世代だけでも冷静な判断力を持っている数人の東京会員に打ち明けて、相談を試みた。わたしの懊悩の末の希望は会の解散であったのだが、しかしこれ等の人の考えの果ての意見はというと、〈組織としての会〉は解散することに賛成だが、小冊誌「アジア女性交流史研究」は、〈山崎朋子の個人編集誌〉として続刊して行くのが望ましい——という結論であった。そこで、会としての数次にわたる話し合いを持った末、「一九七二年四月末日」の年月日附をもって一枚刷りの宣言、「アジア女性交流史研究会の解散と『アジア女性交流史研究』誌の性格改変について」というアピールを発表したのだった。

わたしは山崎朋子の個人名で会員・読者に送ったこの一文は、上述した社会革新運動の挫折やその後の屈折的な彷徨には一切触れず、〈アジア女性交流史〉の〈原点〉に立ち帰りたいとの心願を東京と九州その他の地区会員に相談し、幸いに賛同を得たのでそのように爲る——というふうに結ばれている。そして、一般的な組織論からすればやや強引な措置な

がら、アジア女性交流史研究会は解散し、小冊誌「アジア女性交流史研究」はわたしは山崎朋子の〈個人編集誌〉として
存続して行くこととなったのである。

八

さて、こうしてわたしの個人編集となった「アジア女性交流史研究」は、以後、主として「会則」を定めた一九六九年より前からの例会メンバー、および新たにわたしたちに近づいて来られた内省型と言ってよい人たちの協力によって発行された。誌型も体裁も前と全く同じだが、内容にやや変化があったかも知れない。

創刊号このかた、執筆者には、ざっと見て、高等教育を受け文筆と親しい関係を持っている人が多かった。研究会にはかつて満州開拓移民や中国戦線の兵士であった人、アイヌ族に属する労働家庭の主婦、いわゆる新聞塵紙交換労働にたずさわる人なども来ていたのだが、誌面には、新舟亥三郎「ある満蒙開拓青少年義勇隊員の記録」(二二―十二号)のほか執筆はなかったのである。しかし、わたしの個人編集になってからは、文筆と縁のなかつた人たちの執筆が増えて来ているのだ。

いくつかを挙げれば、岡本頼子さんの「アイヌ女性として」(第十二号)や葛野辰次郎さんの片仮名による「ユーカラ録訳」(第十八号)、大浜秀洋さんの「私の町のからゆきさん」(第十六号)や恩田舟星さんの「私の生涯(ある植民地生活者の記録)」(第十七号)など。「アジア伝道者の妻として」(第十四号、第十八号)を連載された梅森幾美さんは日本保育界の長老と言ってよい方だが、文章には馴染がなく、それなのに力のこもった記録を書かれ、誰も知らぬキリスト教伝道者の活躍を伝えて下さっているのである。

なお、刊行状況について見てみると、会は解散・雑誌を山崎朋子個人編集にしたのが一九七二年の四月末、その七箇月後の十一月に「アジア女性交流史研究」第十二号を出したが、十三号はというと翌七三年の七月、十四号は十二月。これまでも季刊の建前が守られたことはなかったのだが、年に二冊出すのがようやくであった。そして七四年十二月に出した十六号の後、十七号の出たのはほぼ一年後にあたる七五年十月で、七六年は一冊も発行することが出来ず、翌七七年二月に出した第十八号をもって遂に途絶ということになったのだ。

十八号の「編集後記」を読んで下さればわかるように、わたしとその仲間たちは、十九号もその以後も出しつづけるつ

もりであった。それなのに、発行が間遠になり十八号で終刊となってしまったのは、わたしとその仲間たちの「アジア女性交流史」というテーマへの情熱が薄れたからではない。その最大の原因は、第十三号の「編集後記」に上笙一郎が書いてくれているとおり、「山崎朋子が『サンダカン八番娼館』で大宅ノンフィクション賞なるものを受けてしまった」ことだった。「わが家では、子どもを含めて家族三人が家事を分担し合って生活して来ているのですが、妻の多忙でそれが破綻寸前となり、小誌の発行も遅れる」という状況だったが、『サンダカン八番娼館』(一九七二年・筑摩書房)が熊井啓監督によって映画化されるにおよんで、わたしは更に多忙の身と。そしてその結果、第十九号の準備はしていながらとうとう発行に漕ぎつけることが出来ず、「アジア女性交流史研究」は中絶として終りを告げたのであった――

九

短くまとめるつもりだったのが懐しさのあまりついつい長文となってしまったが、最後に、この「アジア女性交流史研究会」なる小さな会は何を生み出したのか――ということが、わたしとしては気にかかる。わたし＝山崎朋子としては、先

述のとおり革命的朝鮮青年との結婚と袂別を原点としての〈アジア〉と〈女性〉への関心であり、その主題を、初めての個人著書『愛と鮮血（アジア女性交流史）』（一九七〇年・三省堂）

より近刊の『朝陽門外の虹（崇貞女学校の人びと）』（二〇〇三年・岩波書店）まで貫きとおせたことは、大きなしあわせであったと思わないではいられない。そして夫の上笙一郎は、『満蒙開拓青少年義勇軍』（一九七三年・中央公論社）という一冊を上梓し、『日本の植民地児童文学』というものの執筆準備を整え終えているらしいが、彼がこのような研究に進み出たのは、アジア女性交流史研究会に参加したことが最大のモメントであったという。すなわちわたしたち夫婦は、この小さな集りから、児童文化の研究者として、女性史の研究者として、生涯にわたる研究テーマを貫いたのだと言ってさしつかえないのである。

北九州⇨筑豊地区から参加された森崎和江氏は、日本の植民地だった朝鮮に少女期を送り、抜き差しならず〈アジア〉という主題にとらえられていた人、それを痛感する故に小冊誌第一号を読んだだけで入会されたのであった。「朝鮮断章」（第三・四号）および「民衆の内律と天皇制国体試論」（第十号）など連載の構えの論篇が続かなかつたのは、雑誌の定期刊行が守れなかった故であるかも知れないと思うと、少し

ばかり心が疼く。けれども、初投に終わってしまったにせよ彼女のアジアにかかわる深い洞察的な発言を得たことは、成果のひとつと言って許されるのではないだろうか。

これに次いで記すべきは、この小さくてルーズな研究会が、アジア研究の学者数人を世に送った——と言えぬまでも、その人たちの若き日に一時的研究的オアシスを提供したという一事である。今日、岡部牧夫さんは『満州国』（一九七八年・三省堂）その他の著者として知られ、小竹一彰さんは『国共内戦初期の土地改革における大衆運動』（一九八三年・アジア政経学会）を出して九州⇨久留米大学教授の地位を持っているが、おふたりとも、若き浪人的研究者として研究例会に出席されていたのだった。研究例会への出席が、おふたりの学問的業績の一端として役立ったと言っても良いのでは。

そして、わたしと同じく〈アジアの人〉と〈結婚〉という局面において〈抜き差しならぬ関係〉を持ってしまったメンバーである平林久枝さんと小谷かつ代（インタラタイロかつ代）さんは、その体験にもとづいてそれぞれに著書を公刊している。平林久枝さんは『わたしを呼ぶ朝鮮』（一九九一年・評論社）を、インタラタイロかつ代さんは『顔の悪い日本人』（一九八五年・学生社）を。また、〈アジア〉には関係ないが〈女性〉につながる主題として第六号に「大田洋子の思い出と作品につ

いて」を書いた江刺昭子さんは、やがてそれを発展させて、『草薙^{くさずえ} 大田洋子評伝』(一九七一年・書房)を完成されたのであった――

以上はわたしの眼にしたかぎりでの営為ないしは業績だけれども、文章をもって表現された以外にも、アジア女性交流史研究会という小さな会の影響があったと言ふことを許してもらいたいと思う。近年のわたしは、かつて研究会に参加されたり聞き書きを得べく訪ねた(アジア女性体験者)に、再会することがほとんどない――わたしより上の世代の方々であり、亡くなってしまわれているからだ。しかし、文章をもって表現することには縁がないが、その胸中に今なおアジア女性交流史研究会へのながしの愛着をいだいているといふ人に、わたしは幾人も出逢っているのである。

たとえば、わたしは昨年ひとりの女性建築家に会ったが、初対面の挨拶を述べるわたしに、彼女は、「お久しぶりです、わたしはアジア女性交流史研究会の集りで、何度も山崎さんのお宅に伺ったことがあるんですよ」と。また、ある地方の講演会場で控室にわたしを訪ねて来られた初老の女性は、「山崎さんのお宅でのアジア女性交流史研究会、時々参加^{ときどき}のわたしには、秘密結社の雰囲気があるみたい感じられて、とても興味があったんですよ」と。

そして、今は同志社大学の教授であり『一九三〇年代日本共産党史論』(一九九四年・三書房)ほか多くの著書を出しておられる田中真人氏からは、小著『サンダカンまで(わたしの生きた道)』を読んでの感想を頂戴したが、その冒頭には以下のように書かれていたのである。――「わたしは、三十年あまり前に、山崎様というより『アジア女性交流史』というべきかも知れませんが、わずかの縁を持った者です。二十六歳の京都大学大学院生であったわたしは、『刑法読本』と『中国人女子学生』という小文を送りつけ、それは光栄にもこの雑誌の第八号に掲載していただきました」と。

小さな小さな会だった(アジア女性交流史研究会)、その会が十年にわたる営みにピリオドを打ってより四半世紀あまり、いま、小冊誌「アジア女性交流史研究」復刻版が出ることになって、感慨まさに量^{はか}り知れず。今なお棄てられずに持っている会員〓購読者カードを、あらためて抱きしめたい思いである――

アジア女性交流史研究 全十八号・一九六七年十一月～一九七七年二月

総目次

アジア女性交流史研究 第一号

一九六七年十一月 責任者・山崎朋子 カット・中山正美 24頁

巻頭言 1

私の会ったアジアの女性たち・その1

朴順天さんと黄信徳さん 山川菊栄 2

アジア女性交流史・第一回

海にひびくからゆきさん哀歌 山崎朋子 7

からゆきさんについて 島一春 8

戦場慰安婦・雑感 伊藤桂一 11

庭のずず玉から 上笙一郎 15

何に対する防波堤であったか

——『正統・日本の貞操』について 水沢周 17

書評

『歳月』林啓訳編 平林久枝 22

『回想のスメドレー』石垣綾子著 田辺洋子 23

『荒野をゆく——熱河・蒙古宣教史』熱河会編 上笙一郎 23

滔天とからゆきさん 大石志げ子 24

編集後記 山崎朋子 24

アジア女性交流史研究 第二号

一九六八年三月 責任者・山崎朋子 カット・中山正美 36頁

朝鮮海峡 森崎和江 1

日本へ嫁いできたベトナム婦人 坂本徳松 2

スメドレーの墓 尾崎秀樹 3

書評

『沖繩女性史』宮城栄昌著、

『沖繩歴史物語』山里永吉著 上笙一郎 4

私の会ったアジアの女性たち・その2

謝冰冰さん・そのほか 山川菊栄 5

黄信徳さんの手紙 山崎朋子 10

アジア女性交流史・第二回

交流の心ともなわぬ朝鮮との交流

——大阪事件およびその後の福田英子 山崎朋子 11

明治の海外売娼覚え書 村上信彦 21

ある満蒙開拓青少年義勇隊員の記録・第1回

新舟亥三郎 28

連載にあたって 編集部 28

「日記」を発表するについて 新舟亥三郎 29

「戦場の村」を世界に知らせましょう!! 34

むくげの会——在日朝鮮婦人の歴史を発掘する

菅間きみ子 35

『衆』という字 上笹一郎 35

「戦場の村」を世界に 石田玲子 36

編集後記 山崎朋子 36

105

アジア女性交流史研究 第三号

一九六八年七月 責任者・山崎朋子 カット・中山正美 36頁

カルティニーニ書簡集より 1

トーチカの祝いをみて——沖繩で 田中寿美子 2

ガンジーと女たち・I

プラフマチャリアについて 蛸山芳郎 3

朝鮮断章・その1

わたしのかお 森崎和江 4

解説 カルティニーニ書簡集

『暗黒を越えて』について 上笹一郎 8

私の会ったアジアの女性たち・その3

山口小静さんをおもう 山川菊栄 9

山川菊栄先生をお訪ねして 野村康子 14

アジア女性交流史・第三回

蒙古女子教育につくした日本女性

——河原操子と鳥居きみ子 山崎朋子 15

ある満蒙開拓青少年義勇隊員の記録・第2回

新舟亥三郎 26

研究会の記 小木曾春恵、鶴田節子 33

『日中友好史』を読む会へのおさそい 33

読者投稿 雁のたより燕のたより 34

城千枝、兼子弘高、今中保子、中村雪子、平山和男、

森崎和江、物井由江、六車洋子、河野信子、土肥良子、

中村兼子、篠原靖子、池田敏雄

本誌の購読について 36

編集後記 山崎朋子 36

アジア女性交流史研究 第四号

一九六九年一月 責任者・山崎朋子 カット・中山正美 36頁

- 魯迅書簡・許広平宛より 1
- ガンジーと女たち・II 2
- 再びプラフマチャリアについて 蝸山芳郎 2
- 大東亜共栄圏と昭和元禄 高井有一 3
- 私の会ったアジアの女性たち・その4 4
- 大震災と「天譴」 山川菊栄 4
- 在韓日本人 藤崎康夫 8
- 読者投稿 雁のたより燕のたより 12
- 野口淳、さねとう・けいしゅう、小宮山量平、広生愛子
- 朝鮮断章・その2
- 土堀 森崎和江 13
- 編集後記 山崎朋子 20
- アジア女性交流史・第四回
海を越えてきた中国女子留学生
——秋瑾と下田歌子 山崎朋子 21
- ある満蒙開拓青少年義勇隊員の記録・第3回
新舟亥三郎 30

アジア女性交流史研究 第五号

一九六九年七月 発行人・山崎朋子 カット・中山正美 26頁

- 朝鮮の古い民謡 1
- 対馬の海女と韓国人 河野信子 2
- インドの女性 小山起生 3
- おかあちゃんの思想 中国で考えたこと 福井稔剛 4
- 民族と人種 小原秀雄、平田久 5
- ガンジーと女たち・III 蝸山芳郎 6
- 私の会ったアジアの女性たち・その1
李徳全女史をお迎えして 平塚らいてう 8
- 「アリランの唄」解説 10
- 座談会 わたしたちのなかの朝鮮
——在韓日本人問題・その他 11
- 石田潤子、江刺昭子、鈴木盛夫、藤崎康夫、又重勝彦、山崎朋子、上笙一郎(司会)
- ある満蒙開拓青少年義勇隊員の記録・第4回
新舟亥三郎 20
- 九州からの便り N・K 25
- 編集後記 藤崎康夫、森崎和江、山崎朋子 26

アジア女性交流史研究 第六号

一九七〇年一月 責任者・山崎朋子 カット・中山正美 34頁

色川大吉「条約改正と安保」より 1

朝鮮の少女 青地晨 2

中国の女性 土肥良子 3

ガンジーと女たち・IV 蛭山芳郎 4

一九六九年秋 石田潤子 5

私の会ったアジアの女性たち・その2

許広平さんと奥村博史とわたし 平塚らいてう 6

大田洋子の思い出と作品について その1

江刺昭子 8

日本の植民地支配(その一)

——第二次朝鮮教育令改正について 欄木寿男 12

座談会

私にとっての「アジア女性交流史研究」

——北九州・筑豊地区アジア女性交流史研究会 16

石橋和子、久保カヨ子、坂本幸子、曾山政光、出口淑子、二宮敏美、古川実、宮本妙子、森崎和江、吉田和子

アジア女性交流史・第五回

亡命者の心に咲いた一輪の花

——鄭毓秀と石川三四郎 山崎朋子 21

読者投稿 雁のたより燕のたより 33

財部鳥子、上木敏郎、永松カズ、中村卓美

編集後記 山崎朋子 34

アジア女性交流史研究 第七号

一九七〇年九月 責任者・山崎朋子

カット・中山正美、岡部牧夫 44頁

日米安保条約についての声明

アジア女性交流史研究会 1

朝鮮語のすすめ 竹内好 2

香港・マニラ・バンコクの印象 江刺昭子 3

ある生いたち 金静子 4

沖縄の踊りをみて 永井路子 6

朝鮮高校生への暴行事件 任晃慧 7

国際結婚と国籍 平林久枝 9

研究会暦々 上笹一郎 10

特集・近代日本と台湾

近代日本植民史と私 岡部牧夫 11

『知られざる台湾』出版ののち 林景明 16

台湾問題についての覚書

——日本人の立場から 梅田正巳 21

会員の本が出ました 15

教えて下さい 25

私のアジア女性交流史・その1

結婚式を一月後に控えて 小谷かつ代 26

ある満蒙開拓青少年義勇隊員の記録・第5回

新舟亥三郎 29

読者投稿 雁のたより燕のたより 38

任展慧、原三千香、森崎晴義、細谷草子、小田島勉、

金沢桂蘭、萩原啓子、桑原ちゑ子、重野幸子、雨宮和子、

鎌倉セツエ、伊藤敬子、坂本道尚、池田真理、林清涼、

田中透、佐伯順子、山内協子、岸黎子、村上百合子

原爆文献を読む会のこと 長岡弘芳 41

アジア女性交流史研究会の組織・運営についての要望

会則 42

本誌の購読について 43

編集後記 森崎和江、欄木寿男、山崎朋子 44

291

アジア女性交流史研究 第八号

一九七〇年十二月 責任者・山崎朋子

カット・斉藤寿一、岡部牧夫 24頁

ネール「インドの発見」より 1

思い出すまま 阿部知二 2

『刑法読本』と一中国人女子学生 田中真人 4

七号を読んで

クントン・インタラタイ著、かつ代・インタラタイ訳 5

ガンジーと女たち・V 蛭山芳郎 6

アジアの児童文学についての資料若干 神宮輝夫 8

私のアジア女性交流史・その2

——アメリカでの結婚式 かつ代・インタラタイ 12

研究会報告の掲載に寄せて 山崎朋子 15

研究例会報告 平野純子 15

高浜虚子『朝鮮』について

啄木と朝鮮 横田真佐子 17

ある満蒙開拓青少年義勇隊員の日記・第6回

新舟玄三郎 19

私たちの反省 欄木寿男 24

編集後記 森崎和江、山崎朋子 24

317

アジア女性交流史研究 第九号

一九七一年四月 責任者・山崎朋子 カット・中山正美 40頁

長谷川テル『嵐のなかのささやき』より 1

特集・私とアジア

私のアジアは、そこにある！ 影山三郎 2

僕にとっての朝鮮と日本 金良浩 3

からゆきさんの墓 上条雅弘 4

ある感覚——孫青年のことなど 中村卓美 5

日本とアジア 伊藤敬子 7

アジアと私(1) 大野進 8

福田英子の帝国主義観 坂本明子 9

私と“アジア” 私と“日本” 平野純子 10

アジアと私——祖父・父・私をめぐって 山内協子 11

私から他者へ、そして「アジア」へ 横田真佐子 12

私とアジア 佐々木光子 13

私の戦争体験とアジア 篠原靖子 14

問題は何処に？ 小竹一彰 15

私とアジア 山口明子 16

奈良女子高等師範学校の中国人・朝鮮人留学生

——とくに中国人留学生の山東出兵反対運動の史料を中心に

中塚明 18

読者投稿 雁のたより燕のたより 25

西田真理子、津村厚子、栗城順子、黒沢常道

いわゆる『内鮮結婚』について

——日朝婚姻関係史の一時期 金一勉 26

巻頭のことば・解説 28

第二次「朝鮮教育令」と朝鮮民族の抵抗

——近代日本の植民地支配その2 欄木寿男 29

念願(上)——中国人主婦の成長の記録

馬昭作、今田好彦訳 35

編集後記 伊藤敬子、欄木寿男、山崎朋子 40

アジア女性交流史研究 第十号

一九七一年九月 責任者・山崎朋子
カット・中山正美、金沢桂蘭 36頁

『論語』（金谷治訳）より 1

アジアと日本のナシヨナリズム 山辺健太郎 2

日本の朝鮮支配と吉野作造

——一つの仮説として 岡部牧夫 10

中国・西省民謡 出嫁ぎ女の唄

安永寿延、服部靖共訳 16

わたしが日本人であること 梅谷朗子 17

ある八路軍とともに 連載その1 石井出かず子 21

ある満蒙開拓青少年義勇隊員の記録・第7回

新舟亥三郎 27

差別とたたかう若者たち

——在日韓国教会の集会から 山口明子 36

アジア女性交流史研究 第十一号

一九七二年三月 責任者・山崎朋子
カット・中山正美、金沢桂蘭 42頁

孫文『三民主義』より 1

ある懸念 重野幸子 2

雑感 石川弘義 3

民衆の内在律と天皇制国家試論

——序にかえて 森崎和江 5

巻頭のことば・解説 小竹一彰 8

日本児童文学における畝傍艦の行方 上笙一郎 9

会員の仕事 K 15

金子文子の朝鮮体験 金一勉 16

——日本の反逆女性 連載その2 石井出かず子 29

ある八路軍とともに 連載その1 石井出かず子 29

研究会の内外 32

ある満蒙開拓青少年義勇隊員の記録・第8回

新舟亥三郎 33

編集後記 小竹一彰、上笙一郎、山崎朋子 42

アジア女性交流史研究会の解散と
『アジア女性交流史研究』の性格改変について
山崎朋子 一九七二年四月末日

441

アジア女性交流史研究 第十二号

一九七二年十一月 編集発行人・山崎朋子
カット・中山正美、金沢桂蘭、岡部牧夫 44頁

朝鮮わらべ唄 1

児童文化のアジア

講談社の絵本『桃太郎』 森崎和江 2

日本わらべ唄にみるアジア蔑視 上笙一郎 4

「趙君瑛の日記」について

——日中関係の一史料 岡部牧夫 7

朝鮮わらべ唄 10

矢内原忠雄の「植民政策」学

——研究ノート 小竹一彰 11

底辺女性よりの証言1

アイヌ女性として 岡本頼子 18

岡本さんのこと 山崎朋子 22

底辺女性よりの証言2

ある朝鮮人女中の話

——姜福舜さんに聞く 山崎朋子 23

「アジア女性交流史研究」在庫分のお知らせ 32

現代アメリカの女性解放運動について 梅谷朗子 33

朝鮮わらべ唄（眠らせ唄） 36

A・デービスのウーマン・リブ批判（資料）

A・デービス、E・ブラウン談、梅谷朗子訳 37

編集後記 山崎朋子 43

487

アジア女性交流史研究 第十三号

一九七三年七月 編集発行人・山崎朋子

カット・金沢桂蘭ほか 44頁

（無題）ブレームンドロ・ミトロ、山田和子訳より 1

アジアの旅

美しい響きの名を持つ町々の旅から 水沢周 2

約束の旅 重野幸子 5

アジアの国の童話

母の手 金耀燮作、李石玉訳 9

子どもの頃のアジア観について 村上百合子 9

幼なじみに 李貞子 13

金耀燮氏のこと 上笙一郎 14

日帝治下における韓国女性に対する教育政策とその抵抗運動に関する研究

丁堯燮著、有木憲子訳 15

伝統中国の児童教育 小竹一彰 43

編集後記 山崎朋子、上笙一郎 44

533

アジア女性交流史研究 第十四号

一九七三年十二月 編集発行人・山崎朋子

カット・中山正美、金沢桂蘭 24頁

尾崎秀実の手紙 1

タゴン村の昼と夜 佐江衆一 2

子どもの頃のアジア観 河野信子 4

白秋童謡と植民地 上笙一郎 5

番付「女大学」 林英夫 6

底辺生活者から見たテレビ 山崎朋子 8

雑誌紹介 12

わたしのアジア体験

アジア伝道者の妻として・その1

梅森幾美 13

韓国の女性たちの訴え

買春観光の即時中止を！ 山口明子 23

編集後記 山崎朋子 24

「アジア女性交流史研究」定期購読のすすめ 24

在庫分冊子の主要目次 24

559

アジア女性交流史研究 第十五号

一九七四年七月 編集発行人・山崎朋子

カット・中山正美、斉藤寿一 38頁

京都子守り唄 1

子どもの中のアジア 山内協子 2

朝鮮生まれの日本人であるということ 清水真砂子 3

女の重たさ 梅谷朗子 4

「一寸先は闇」と「木を見て森を見ず」 小竹一彰 5

テンゲル——ジャワのある特異な社会 床井恵 6

新芋のこと 上笙一郎 10

韓国女性の民族運動に関する研究(上)

——三・一運動を中心として

丁堯燮著、山口明子訳 11

「家庭科の男女共修をすすめる会」について

嶋田道子 27

わたしのアジア体験

私のアジア女性交流史・その4

——アメリカ・タイ・日本 インタラタイ・かつ代 28

アジア伝道者の妻として・その2 梅森幾美 31

編集後記 山崎朋子、上笙一郎 38

「アジア女性交流史研究」定期購読のおすすめ 38

在庫分冊子の主内容 38

599

アジア女性交流史研究 第十六号

一九七四年十二月 編集発行人・山崎朋子

カット・中山正美、岡部牧夫 38頁

国境三十八度線 森崎和江 1

中国の女性私見 菊地昌典 2

気になっていること

——アジアの青年群像1 タイ 井上澄夫 3

白秋と植民地小学校々歌 石井出かず子 4

『浮世風呂』のおばあさん 杉みき子 6

差別について 清水悦子 8

ゴゼ研究と市川さんのこと 山崎朋子 10

高田瞽女 三百年の伝統に生きる 市川信次 11

インタラタイ・かつ代さんの手紙より 21

私の町のからゆきさん 大浜秀洋 22

韓国女性の民族運動に関する研究(下)

——三・一運動を中心として

丁堯燮著、山口明子訳 28

「アジア女性交流史研究」定期購読のおすすめ 37

在庫分冊子の主内容 37

639

アジア女性交流史研究 第十七号

一九七五年十月 編集発行人・山崎朋子
カット・岡部牧夫、金沢桂蘭 30頁

- 「王と農民」バハールより 1
- この頃思うこと 新村由美子 2
- ある感想 鹿野政直 3
- 渡辺和子さんのこと 山口明子 5
- K君のこと アジアの青年群像2 井上澄夫 6
- 『タイ繊維労働者の実態調査報告』解説 山崎朋子 6
- タイ繊維労働者の実態調査報告
- カンチャナ他編、三宅義子訳 7
- 恩田富次郎さんのこと 山崎朋子 13
- 私の生涯——ある植民地生活者の記録 恩田舟星 14
- オボユ沢を尋ねて 上笙一郎 21
- アジア伝道者の妻として・その3 梅森幾美 22

671

アジア女性交流史研究 第十八号

一九七七年二月 編集発行人・山崎朋子 カット・中山正美 32頁

- バチエラー八重子『若きウタリに』より 1
- “限りなく日本人に近い朝鮮人” 金錫粉 2
- 日本人の海外旅行 鹿山啓子 3
- 大海を知ろう 三島昭子 4
- 十六号掲載の清水悦子「差別について」を批判する 橘史朗 5
- 清水悦子氏「差別について」について 佐野典子 6
- 雁のたより 朴蓮寿 6
- 日本ママのフィリップン訪問 小塩れい 7
- 燕のたより 朱洪吉 9

私のアジア女性交流史・その5

——タイで山崎さんの著作をテキストに使う

インタラタイ・かつ代

10

燕のたより 黎子・パイジャ

12

アジア伝道者の妻として・その4 梅森幾美

13

ユーカラの記録を紹介する

葛野さんの仕事

山崎朋子

18

葛野辰次郎さんのこと 岡本頼子

19

生長語り 葛野辰次郎

20

アイヌ・ユーカラ・その1

天界の神様と人間祖先の伝説語り

葛野辰次郎

31

編集後記 山崎朋子

32

	4(カット), 5(カット), 6(カット), 7(カット), 9(カット), 10(カット), 11(カット), 12(カット), 14(カット), 15(カット), 16(カット), 18(カット)
永井路子	7 - 6
永松カズ	6 - 33
長岡弘芳	7 - 41
新舟玄三郎	2 - 28, 2 - 29, 3 - 26, 4 - 30, 5 - 20, 7 - 29, 8 - 19, 10 - 27, 11 - 33
西田真理子	9 - 25
二宮敏美	6 - 16
野口淳	4 - 12
野村康子	3 - 14

は行

バイジャ, 黎子	18 - 12
萩原啓子	7 - 38
朴蓮寿 <small>パクヨンズ</small>	18 - 6
服部靖	10 - 16
林英夫	14 - 6
原三千香	7 - 38
平田久	5 - 5
平塚らいてう	5 - 8, 6 - 6
平野純子	8 - 15, 9 - 10
平林久枝	1 - 22, 7 - 9
平山和男	3 - 34
広生愛子	4 - 12
福井稔剛	5 - 4
藤崎康夫	4 - 8, 5 - 11, 5 - 26
ブラウン, E	12 - 37
古川実	6 - 16
細谷草子	7 - 38

ま行

馬昭 <small>マーチャオ</small>	9 - 35
欄木寿男	6 - 12, 7 - 44, 8 - 24, 9 - 29, 9 - 40
又重勝彦	5 - 11
三島昭子	18 - 4
三宅義子	17 - 7
水沢周	1 - 17, 13 - 2

宮本妙子	6 - 16
村上信彦	2 - 21
村上百合子	7 - 38, 13 - 9
物井由江	3 - 34
森崎和江	2 - 1, 3 - 4, 3 - 34, 4 - 13, 5 - 26, 6 - 16, 7 - 44, 8 - 24, 11 - 5, 12 - 2, 16 - 1
森崎晴義	7 - 38

や行

安永寿延	10 - 16
山内協子	7 - 38, 9 - 11, 15 - 2
山川菊栄	1 - 2, 2 - 5, 3 - 9, 4 - 4
山口明子	9 - 16, 10 - 36, 14 - 23, 15 - 11, 16 - 28, 17 - 5
山崎朋子	1 - 7, 1 - 24, 2 - 10, 2 - 11, 2 - 36, 3 - 15, 3 - 36, 4 - 20, 4 - 21, 5 - 11, 5 - 26, 6 - 21, 6 - 34, 7 - 44, 8 - 15, 8 - 24, 9 - 40, 11 - 42, 12 - 22, 12 - 23, 12 - 43, 13 - 44, 14 - 8, 14 - 12, 14 - 24, 15 - 38, 16 - 10, 16 - 38, 17 - 6, 17 - 13, 17 - 30, 18 - 18, 18 - 32, 1972年4月末日「アジア女性交流 史研究会の解散と『アジア女性交 流史研究』の性格改変について」
山辺健太郎	10 - 2
床井恵	15 - 6
横田真佐子	8 - 17, 9 - 12
吉田和子	6 - 16

ら行

李石玉 <small>リソクテア</small>	13 - 9
李貞子 <small>リチョンジャ</small>	13 - 13
林景明 <small>リンケンミン</small>	7 - 16
林清涼 <small>リンケンリョウ</small>	7 - 38
蟬山芳郎	3 - 3, 4 - 2, 5 - 6, 6 - 4, 8 - 6
六車洋子	3 - 34

岡本頼子 12 - 18, 18 - 19
恩田舟星 17 - 14

か行

鹿野政直 17 - 3
鹿山啓子 18 - 3
影山三郎 9 - 2
金沢桂蘭 7 - 38, 10 (カット), 11 (カット),
12 (カット), 13 (カット),
14 (カット), 17 (カット)
兼子弘高 3 - 34
鎌倉セツエ 7 - 38
上笙一郎 1 - 15, 1 - 23, 2 - 4, 2 - 35,
3 - 8, 5 - 11, 7 - 10, 11 - 9,
11 - 42, 12 - 4, 13 - 14,
13 - 44, 14 - 5, 15 - 10,
15 - 38, 17 - 21
上木敏郎 6 - 33
上条雅弘 9 - 4
カンチャナ 17 - 7
菊地昌典 16 - 2
岸黎子 7 - 38
金一勉 カムイルベン 9 - 26, 11 - 16
金静子 カムジヤンジュ 7 - 4
金錫粉 カムソツブン 18 - 2
金良浩 カムヤンフ 9 - 3
金耀雙 カムヨウソウ 13 - 9
葛野辰次郎 18 - 20, 18 - 31
久保カヨ子 6 - 16
栗城順子 9 - 25
黒沢常道 9 - 25
桑原ちゑ子 7 - 38
河野信子 3 - 34, 5 - 2, 14 - 4
小竹一彰 9 - 15, 11 - 8, 11 - 42,
12 - 11, 13 - 43, 15 - 5
小谷かつ代→インタラタイ・かつ代
小宮山量平 4 - 12

さ行

さねとう・けいしゅう 4 - 12
佐江衆一 14 - 2
佐伯順子 7 - 38
佐々木光子 9 - 13

佐野典子 18 - 6
斉藤寿一 8 (カット), 15 (カット)
坂本明子 9 - 9
坂本徳松 2 - 2
坂本道尚 7 - 38
坂本幸子 6 - 16
重野幸子 7 - 38, 11 - 2, 13 - 5
篠原靖子 3 - 34, 9 - 14
島一春 1 - 8
嶋田道子 15 - 27
清水悦子 16 - 8
清水真砂子 15 - 3
城千枝 3 - 34
神宮輝夫 8 - 8
新村由美子 17 - 2
菅間きみ子 2 - 35
杉みき子 16 - 6
鈴木盛夫 5 - 11
曾山政光 6 - 16

た行

田中寿美子 3 - 2
田中透 7 - 38
田中真人 8 - 4
田辺洋子 1 - 23
高井有一 4 - 3
財部鳥子 6 - 33
竹内好 7 - 2
橋史朗 18 - 5
朱洪吉 チュホンキョウ 18 - 9
丁堯雙 チュウヨウソウ 13 - 15, 15 - 11, 16 - 28
津村厚子 9 - 25
鶴田節子 3 - 33
出口淑子 6 - 16
デービス, A 12 - 37
土肥良子 3 - 34, 6 - 3

な行

中塚明 9 - 18
中村兼子 3 - 34
中村卓美 6 - 33, 9 - 5
中村雪子 3 - 34
中山正美 1 (カット), 2 (カット), 3 (カット),

執筆者名 索引

数字は号-頁、引用文献の著者は除く

あ行

- 阿部知二 8 - 2
青地晨 6 - 2
雨宮和子 7 - 38
有木憲子 13 - 15
伊藤桂一 1 - 11
伊藤敬子 7 - 38, 9 - 7, 9 - 40
池田敏雄 3 - 34
池田真理 7 - 38
石井出かづ子 10 - 21, 11 - 29, 16 - 4
石川弘義 11 - 3
石田潤子 5 - 11, 6 - 5
石田玲子 2 - 36
石橋和子 6 - 16
市川信次 16 - 11
井上澄夫 16 - 3, 17 - 6
今田好彦 9 - 35
今中保子 3 - 34
インタラタイ・かつ代(小谷かつ代)
7 - 26, 8 - 5, 8 - 12, 15 - 28,
16 - 21, 18 - 10
インタラタイ・クントン 8 - 5
任展慧^{インチョンヘ} 7 - 38
任晃慧^{インフワンヘ} 7 - 7
梅田正巳 7 - 21
梅谷朗子 10 - 17, 12 - 33, 12 - 37,
15 - 4
梅森幾美 14 - 13, 15 - 31, 17 - 22,
18 - 13
江刺昭子 5 - 11, 6 - 8, 7 - 3
小木曾春恵 3 - 33
小塩れい 18 - 7
小田島勉 7 - 38
小原秀雄 5 - 5
小山起生 5 - 3
尾崎秀樹 2 - 3
大石志げ子 1 - 24
大野進 9 - 8
大浜秀洋 16 - 22
岡部牧夫 7(カット), 7 - 11, 8(カット),
10 - 10, 12(カット), 12 - 7,
16(カット), 17(カット)

編者紹介

山崎朋子◎やまざき・ともこ

一九三二年生まれ。福井県出身。福井大学教育二部二年修了。女性史研究者・ノンフィクション作家。おもな著書に『サンダカン八番娼館』（一九七三年、大宅壮一ノンフィクション賞受賞）、『サンダカンの墓』『あめゆきさんの歌』（以上、からゆきさん三部作）、『アジア女性交流史（明治・大正期篇）』『サンダカンまで（私の生きた道）』『朝陽門外の虹』ほか多数。

上笙一郎◎かみ・しょういちろう

一九三三年生まれ。埼玉県出身。文化学院文科卒。児童文化史研究者。おもな著書に『日本児童史の開拓』（一九九〇年、日本児童文学学会特別賞受賞）、『児童文学概論』『児童出版美術の散歩道』『文化学院児童文学史稿』ほか多数。山崎朋子との共著に『日本の幼稚園』（一九六六年、毎日出版文化賞受賞）、『光ほのかなれども（二葉保育園と徳永恕）』（一九八〇年、日本保育学会賞受賞）がある。

本書は、雑誌「アジア女性交流史研究」（全十八号・一九六七年十一月・一九七七年二月）を原寸（タテ二四六ミリ×ヨコ一七五ミリ）のまま合冊復刻したものである。今回、新たに解説・山崎朋子著「『アジア女性交流史研究』の思い出、総目次、執筆者名索引を掲載し、読者の便に供するよう努めた。なお、執筆者のうち連絡がとれなかった方がいます。ご本人もしくはお心当たりの方はお報せください。

アジア女性交流史研究

2004年1月30日初版第1刷発行

編者 山崎朋子, 上笠一郎

発行者 里館勇治

発行所 有限会社港の人

神奈川県鎌倉市由比ガ浜3-11-49 〒248-0014

phone 0467-60-1374 fax 0467-60-1375

<http://plaza29.mbn.or.jp/~mnh/>

印刷製本 モリモト印刷株式会社

ISBN4-89629-120-4 C3030

